

平成三十年度

問題冊子

国	教	科	目	ページ数
語				
国				
語				
16				

試験開始の合図があるまで、問題冊子を開かないこと。

解答の書き方

1. 解答は、すべて別紙解答用紙の所定欄に、はっきりと記入すること。
2. 解答を訂正する場合には、きれいに消してから記入すること。
3. 解答用紙には、解答と志望学部及び受験番号のほかは、いつさい記入しないこと。

注意事項

1. 試験開始の合図の後、解答用紙に志望学部及び受験番号を必ず記入すること。
2. 問題の内容についての質問には、いつさい応じないが、その他の用事があるときは、だまって手をあげて、監督者の指示を受けること。
3. 試験終了時には、解答用紙を机上の右側に置くこと。
4. 試験終了後、問題冊子は持ち帰ること。

国語問題訂正

訂 正

問題冊子 11ページ

[2] 問三 設問の文

(誤) 『これは盗みだろうか』

(正) 「これは盗みだろうか」

〔1〕

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

「ロマンの世界」を作り上げるのは、現実のみすばらしさと、もつと素晴らしい世界への「憧憬」、というふたつの契機である。

「いまここ」の世界よりもつと素敵な世界があるという直観によって、それははじめの芽を持つ。「ロマン的世界」は「いまここ」の現実、つまり日常の世界の否定と、「未来」および「向こう」の世界への「憧憬」を本質的に含んでいるのだ。

ロマン的世界は、たいていの場合、さまざまに与えられる「物語」のかたちで子供の脳裏に住みつく。また絵や音楽のかたちがきつかけとなることもあるだろう。しかし大事なものは、それが必ず現実の「向こう」のもうひとつの「世界」として予感され、したがって、未知の世界の持つ特有の魅力で子供たちを引きつけるという点だ。

ロマン的世界を知らない子供にとっては、じつはまだ「世界」というものそれ自体が現われていない。「世界」とはひとつの構造を持ったものである。「自我」の内側から言うと、それはひとつの未定の中心を持ち、その中心に向かってつぎつぎに新しい光景が開けてゆくという固有の構造を持っている。

それはちょうどファミコンゲームのように、ひとつの場面を知悉ちしじつするつぎの場面が未知の魅惑を伴って現われるといったかたちで展開する。つぎつぎに現われる新しい光景は、そのつどそれが何であるかが体験によって知られていく。この際、「未知」として現われたものがつぎつぎに「既知」のものに変えられていくという体験の流れが、「自我」にとっては大きなエロスなのである。

「自我」のはじめのエロスは、他者の承認(母から愛されること)という点に中心化される。この幻想的な「自我」確認は、子供にとつてのはじめての能動的な行為である。なぜならそれは、身体的なエロスの直接性からの離脱りだつ＝断念を意味するからだ。

さて、子供にとつてつぎに現われるエロスのゲンセン⑦は、この「世界体験」ということである。ひとつの「世界」を経験するということとは、その世界と「自我」との間に安定した関係を作り、同時にその世界についてのひとつの説明の体系を作り上げること

だ。子供がつきつきにさまざまな世界を経験するとき、彼は、その世界と自分との関係の体系をどんどん押し広げていく。このことはまた、「自我」が徐々に拡大し、強められるという体験でもある。他者の承認が子供にとってははじめの幻想的なエロスの原理だとすると、この何らかの「世界」の中で「自我」拡張ということは、人間における第二のエロスの原理である。

ロマンの世界が子供にとって強い魅惑を持つ理由は、明らかだ。

現実の世界の体験（両親との世界、仲間との世界など）はたしかにひとつの「世界」の体験だと言えるが、そこには絶えざる「挫折」と「断念」が含まれる。現実の世界で「自我」拡張が生じるためには、「他者による承認」ということが不可欠だからである。

仲間たちとの世界では、ヘーゲルの言うような「主人と奴隷」の間の相互承認の闘いが必ず生じる。子供は自分の能力を力けて回りの人間の中の「主人」たろうとするが、そこでつねに勝利するとはかぎらない。むしろ現実の世界では、彼はつねに自分の力が、全能ではありえないことを思い知らされる。

これに対して、ロマンの世界では「相互承認の闘い」はあらかじめ抜き取られている。そこではただ、「世界」が新しい様相でつきつきに現われ出し、その世界を自分のものにしていくという契機だけがある。

ロマン的世界では、現実世界の中でつねにつきまとう「自我」の不全感^①は打ち消されているのだ。

たとえば『青い鳥』を読む子供たちは、チルチル、ミチルとともに不思議な世界を、「自我」を脅かされる不安なしに、つきつきに体験する。ここでの未定の中心は「幸せの青い鳥」を見つけ出すことだ。その魅惑は、いろいろな新しい光景、人物たちを知っていく、体験としてゆらめき出すだろう。この「物語」の世界では自分が「主人公」であることが脅かされることはなく、危険や障害は必ずやがて「乗り超えられる」のである。

こうして、子供にとつてはまず、「ケガれた世界」と「ロマン的世界」が、現実世界での「不安」や「挫折」の反映として成立する。

「ケガれた世界」は「自我」解体の怯えの反映であり、「ロマン的世界」は逆にその打ち消しとして、挫折のない世界に対する「憧れ」を映したものだと言える。子供の不安や憧憬ははつきりした「かたち」を持たないため、鏡のようにそのまま映し出されるこ

とはない。そのためにそれは、何らかの像(イメージ)を借りる。「物語」はこのイメージ創出の役割を果たすのである。

恐ろしいユウレイ^⑧や物の怪^おの物語を聞くと、子供たちは「自我」のうちの不安や怯えがめくり返されるのを体験する。またおもしろいお菓子や眩^{まぼゆ}い御殿、きらびやかな衣服などに彩られた世界の光景を見ると、わくわくするような「憧れ」と魅惑をかきたてられる。子供たちのうちのひそかな気分や情緒は、物語が与えるイメージの力によって増幅され、「かたち」を持つようになる。こうして「物語」は、子供の心的な世界の情緒をイメージにおいて増幅しながら、その秩序はそのままに表現する。

わたしたちはここで、人間にとってのはじめの「価値意識」、「きれい—きたない」の由来を位置づけることができる。

「きれい—きたない」は、言うまでもなく人間に固有の価値秩序である。動物にとっての価値秩序はまず「快—不快」であり、つぎに「安心—不安」だが、これは動物の生命体としての欲望・身体性からの要請が環境世界に対して作り上げている自然な秩序である。しかし「快—不快」「安心—不安」の秩序は、動物的な欲望・身体性の中では、どれほど「高度」になっても「きれい—きたない」「あるいは「よい—わるい」の秩序に変わることはない。

「きれい—きたない」の秩序が成立するための条件を、わたしたちはすでに見てきた。

それはまず、エロスの原理が「自我」に中心化されること、つぎに「自我」が、本能的な生命の危険ではなく、「他人から承認されないこと」を「自我」解体の重大な不安として受け取るような感受性を作り上げることである。

さらに、「自我」不安の打ち消しとして、より大きなエロスの世界への「憧憬」が成立していなければならぬ。つまり、「きれい—きたない」という価値の秩序が成立するためには、「ケガレた世界」、「ロマン的世界」という心的世界の固有な秩序が成立していなければならない。

ちように動物的身体にとつて、ある対象はそれが危険、ジャマ^⑨、不気味であるとき「不快」であるように、人間の幻想的身体にとつてある対象は、それが「自我」の不安や怯えをもたらすとき、「きたない」ものとなる基本の条件を持つ。別の言い方をすると、「きたない」という情動の本質には、「自我」の解体や不安の感情を喚起するようなものが必ず含まれている。

これに対して「きれい」なものとは、「自我」の不安や解体の危険なしにエロスのな原理を与え、新しい体験のエロスを予感させるような対象である。したがってそれは、新しいエロスの可能性(その直観)と「憧憬」を喚起するような情動とを含む。

要約すれば、「快—不快」という秩序は、生理的身体が自然的環境に対してとる基本的態度だが、「きれい—きたない」の秩序は、「自我」化された幻想的身体が「世界」に対してとる基本的態度なのである。

ここで注意すべきは、「きれい—きたない」の秩序は「判断」の秩序ではなく、「感受性」の秩序として成立するということである。

「きれい—きたない」は、生理身体的な「快—不快」とは違って、人間の生活経験の積み重ねの中でその心的世界の変容として形成された秩序である。しかし重要なのは、いったん形成されたその秩序は、「快—不快」と同様、その形成の由来が意識にはまったく与えられないということだ。

「きれい—きたない」という秩序の底には、「自我」の不安や憧憬という契機がヒソソ^④んでいるが、人はそれを意識することができない。むしろ「きれい—きたない」は、あたかも生得の身体的な感受性であるかのようにわたしたちにとって現われるのである。

つまり、「きれい—きたない」は、「快—不快」とは違った原理と由来を持つのに、「快—不快」と同じように感受化^②身体化されている。人間があるものを「きれい」だと感じるに至るのにはそれなりの理由があるが、しかしわたしたちは、あるものがなぜ「きれい」なのかを、知るのではなく、ただそう感じるだけなのである。

このことの大きな意味は、まさしくそのことによつて、人間は意味の織物としての「世界」を、単にそういうものとして、知り、判断するのではなく、むしろただ「感じ」、「味わう」、ということだ。

「きれい—きたない」という秩序は、基本的に視覚と聴覚を入口にしている。そして視覚的、聴覚的イメージはここで不思議な変容を遂げている。それらは、もともとは中性化された感覚、直接的なエロスを伴わない認識のための感官^②だったのに、「きれい—きたない」の心的秩序が成立するやいなや、触覚や味覚や嗅覚に代わつて、人間が世界からエロスを受け取る際の、中心的な器官、いわば幻想的器官となるのである。

人間の「世界」は言葉の綾糸あやいとによって織り上げられた、「意味の世界」である。ふつう、意味の世界は概念的な理解というかたちでしか捉えることができないと考えられている。しかし人間は「きれい—きたない」という感受性の能力を持ち、それによってこの意味の世界を、“感じられるもの”、つまりエロスの③「世界」に変容させているのである。

(本文は、講談社刊の竹田青嗣『エロスの世界像』に拠る。なお本文を省略した部分がある。)

問一 傍線部⑦⑧のカタカナを漢字に直せ。

問二 傍線部①とあるが、筆者はなぜそれを「知っていく体験」としてとらえているのか。筆者の考えに即して詳しく説明せよ。

問三 傍線部②とあるが、なぜ「幻想的器官」といえるのか。筆者の考えを説明せよ。

問四 傍線部③とあるが、筆者の述べる「エロス」とは人間にとってどのような意味を持つと考えられるか。文章全体の文脈をふまえ、簡潔に説明せよ。

〔2〕

次の文章は、昭和二年に発表された島崎藤村「分配」の一節である。これを読んで、後の問いに答えよ。

私たちの家の入り口へ来て立つような貧困者も多くなった。きのうは一人来た。きょうは二人来たというふうになり、困って来る人がどれほどあるかしのれない。震災後は働きたいにも仕事がないと言つて救いを求めるもの、私たちの家へ来るまでに二日も食わなかつたというもの、そういう人たちを見るたびに私は自分の腰に巻きつけた帯の間から蝦蟇がま口を取り出して金を分けることもあり、自分の部屋の押入れから古本を取り出して来て持たせてやることもある。中にはそういう物乞いに慣れ、逆に社会の不合理的を訴え、やる瀬のない憤りを残して置いて行くような人々も少なくない。私は自分に都合のできるだけの金をそういう人々の前に置き、

「まっこと困つたら、来たまえ。」

と、よく言い添えた。そして、それらの人々が帰つて行つたあとで、年も若く見たところも丈夫そうな若者が、私ごとき病弱な、しかも年とつたものところへ救いを求めに来るような、その社会の矛盾に苦しんだ。正義が顛あはれて、大きな盗賊やみじめな物乞いが出た。

私たちの家の婆やは、そういう時の私の態度を見ると、いつでも憤慨した。^①毎月働いても十八円の給金にしかならないと言いたげなこの婆やは、見ず知らずの若者が私のところから持つて行く一円、二円の金を見のがさなかつた。

そういう私たちの家では、明日の米もないような日がこれまででなかつたというまでで、そう余裕のある生活を送つて来たわけではない。子供らが大きくなればなるほど金がかかつて来て、また太郎の家のは毎月三十円ずつ助けているし、太郎の家で使つてゐる婆さんの給金も私のほうから払つてゐるし、三郎が郊外に自炊生活を始めてからは、そちらのほうにも毎月六十円はかかつた。次郎や末子というものも控えていた。私も骨が折れる。でも、私は子供らと一緒に働くことを楽しみにして、どんなに離れて暮らしていても、その考えだけは一日も私の念頭を去らなかつた。

思いもよらない収入のある話が、この私の前に提供されるようになった。

私たちの著作を叢書の形に集めて、予約でそれを出版することは、これまでとても書肆しょしによって企て⑦られないではなかった。ある社で計画した今度の新しい叢書は著作者の顔触れも広く取り入れてあるもので、その中には私の先輩の名も見え、私の友だちの名も見えるが、菊版三段組み、六号活字、総振り仮名付きで、一冊三四百ページもあるものを思い切った安い定価で予約応募者にわかとうというのであった。私たちはその特筆大書した定価の文字を新聞紙上の広告欄にも、書籍小売店の軒先にも、市中を練り歩く広告夫の背中にまで見つけた。この思い切った宣伝が廉価出版の氣勢を添えて、最初の計画ではせいぜい二三十万ものだろうと言われていたのが、いよいよ蓋たをあけて見るとその十倍もの意外に多数な読者がつくことになった。

思いもよらない収入のある話と私が言ったのは、この大量生産の結果で、各著作者の所得をなるべく平均にするために、一割二分の約束の印税の中から社預かりの分を差し引いても、およそ二万円あまりの金が私の手にはいるはずであった。細い筆を力に四人の子供らを養って来た私に取って、今までそんなにまとまって持つてみたこともない金である。

まだ私は受け取りもしないうちから、その金のことを考えるようになった。私たちの家では人を頼んで検印を押すだけに十日もかかった。今度の出版の計画が次第⑧に実現されて行くことを私の子供らもよく知っていた。しかしそんなまとまった金がふところにはいるということを、私は次郎にも末子にも知らせずに置いた。

私は、「財は盗みである」というあの古い言葉を思い出しながら、庭にむいた自分の部屋の障子に近く行った。四月も半ばを過ぎたところで、狭い庭へも春が来ていた。

私は自分で自分に尋ねてみた。

「これは盗みだろうか。」⑨

それには私は、否いなと答えたかった。過ぐる三十年が二度と私の生涯に来ないように、あの叢書に入れるはずの私の著作も二つとは私にないものである。長い労苦と努力とから生まれて来たものとして、髪も白さを増すばかりのような私の年ごろに、受けてやましい報酬であるとは思われなかった。

しかし、私も年をとったものだ。少年の時分から私は割合に金銭に淡泊なほうで、余分なものをたくわえようとするような、そういう考えをきょうまで起こした覚えもない。今度という今度は、それが私に起こって来た。私もやつぱり、金でもたくわえて置いて、余生を安く送ろうとするような年ごろに達したのかもしれない。日あたりも悪く、風通しも悪く、午後の四時というと階下したにある冬の障子はもう薄暗くなつて、夏はまた二階に照りつける西日も耐えがたいこんな谷の中の借家にくすぶっているよりか、自分の好きな家でも建て、静かに病後の身を養いたいと考えるような、そういう年ごろに達したのかもしれない。

今でこそあまり往来ゆきもしなくなつて、年始状のやり取りぐらいな交際に過ぎないが、私の旧い知人の中に一人の美術家がある。私はその美術家の苦しい骨の折れた時代をよく知っているが、いつのまにか人もうらやむような大きな邸しきを構え住むようになった。昔を知る私にはそれが不思議なくらいに思えて、あの侘わしさ①を友としていたような人はどこへ行つたらう、とそれを長い間の疑問として残していた。年をとつてみて、私も他人の心を読むようになった。あれはただ裕福な人の邸ではなくて、若い時分に人一倍貧苦をなめ尽くした人の住む家だと気がついた。

次郎や、末子をそばに置いて、私は若いさかりの子供らが知らない貯蓄の誘惑に気を腐らした。あるところにはあり過ぎるような金から見たら、おそろく二万円ぐらいはなんでもないかもしれない。しかし、ないところにはなさ過ぎる金から見たら、それだけまとまった高でも大きい。でも、私は、土の中へでも埋めて置くように、死に金をしまつて置く気はなかった。どうそれを使つたものかと思つた。

どの時代を思い出してみても、私にはそう楽なという日もない。ずっと以前に、私は著作の支度をするつもりで、三年ばかり山の上に全く黙つて暮らしたこともある。私もすでに結婚してから三年目で、家のものなぞはそろそろ単調な田舎生活②に飽いて来て、こんなことでいつ芽が出るかという顔つきであつたし、それに私たちの家ではあの山の上だからやつて行けたと思うほどの切り詰めた暮らしをしていたから、そういう不自由さとも戦わねばならなかつたし、毎年十一月から翌年の三月へかけて五月もの長い冬とも戦わねばならなかつた。一度降つたら春まで溶けずにある雪の積もりに積もつた庭に向いた部屋で、寒さのた

めに凍^{しも}み裂ける恐ろしげな家の柱の音などを聞きながら、夜おそくまでひとりで机にむかっていた時の心持ちは忘れられない。でも、私はあの山の上から東京へ出て来て見るたびに、とにもかくにも出版業者がそれぞれの店を構え、店員を使って、相応な生計を営んで行くのにその原料を提供する著作者が——少数の例外はあるにもせよ——食うや食わずにいる法はないと考えた。私が全くの著作生活に移ろうとしたのも、そのころからであった。

私の目にはまだ、六畳に二畳の二階が残っている。壁がある。障子がある。ごちゃごちゃとした町中の往來を隔^へて、魚を並べた肴^{さかな}屋の店がその障子の外に見おろされる。向かい隣には、白い障子のはまった下町風の窓も見える。そこは私がああの上から二度目に越して行った家の二階で、都会の空気も濃いところだ。かつみさん夫婦がかわるがわる訪ねて来て、よく登つて来たのもその二階だ。そこに私は机を置いて、また著作にふけたが、そのころに私の書いたものが子供らの母さんの女学校時代の友だちのうわさにも上ったかして、そういう昔なじみの家庭を見に行つて帰つて来るたびに、いろいろ友だちから冷やかされたことだの、「お富さん(子供らの母さん)もずいぶん人がいい、あんなことを書かれて、黙^{もく}っている細君があるものか。」と言われたことだの、それをあゝの母さんが私に話してみせた。でも、そういう人は私の書いたものが旧^きい友だちのうわさに上るといっただけにも満足して、にわかにな自分の夫を見直すような顔つきであつたには、私も苦笑せずにはいられた。そのころの私が自分の周囲に見いだす著作者たちとは言えば、そのいずれもが新聞社に關係するとか、学校に教鞭^{きょうべん}を執るとか、あるいは雑誌の編集にたずさわるとかして、私のように著作一方で立とうとしているのもめずらしいと言われた。私はよくそう思った。これはまだ著作で家族を養えるような時代ではないのだと。私もやせ我慢にやせ我慢を重ねていたが、親子四人に女中を一人置いて、毎月六七十円の生活費を産み出すにすら骨が折れた。そのころの私たちは十六円の家賃の家で辛抱したが、それすら高過ぎると思つたくらいだ。

三年の外国の旅も、私の生涯の中でのさびしい時であつたような気がする。もつとも、その間には、これまで踏んだことのない土を踏み、交わつたことのない人にも交わつてみ、陰もあり日向^{ひなた}もあるのだからその複雑な気持ちにはちよつと言葉には尽くせない。実に無造作に、私はあの旅に上つて行った。その無造作は、自分の書齋を外国の町に移すぐらいの考えでいた。全く知ら

ない土地に身を置いて見ると、とかく旅の心は落ちつかず、思うように筆も取れない。著作をしても旅を続けられるつもりの私は、かねての約束もその十が一をも果たし得なかった。「これまで外国に来て、著作をしたという人のためしがない。」と言って、ある旅行者に笑われたこともある。でも私は国を出るころから思い立っていた著作の一つだけは、どうにかしてそれを書きあげたいと思ったが、とうとう草稿の半ばで筆を投げてしまった。国への通信を送るぐらいが精いっぱいの仕事であった。それに国との手紙の往復にも多くの日数がかかり世界大戦の始まってからはことに事情も通じがたいもどかしさに加えて、三年の月日の間には国のほうで起こった不慮な出来事とか数々の故障とかがいつそう旅を困難にした。私も、外国生活の不便はかねて覚悟して行つたようなものの、旅費のことなどでそう不自由はしないつもりであった。時には前途の思いに胸がふさがつて、さびしさのあまり寝るよりほかの分別もなかつたことを覚えてゐる。

過去を振り返つて見ると、今の私がか不自由もせずに子供らを養つて行けるというだけでも、不思議なくらいである。あの子供らの母さんの時代のことを思うと、今の借家すまいでも私には過ぎたものだ。

「富よみとは、生命よりほかの何物でもない。」

この言葉が私を励ました。

私は旅人のような心で、今までどおりのごくあたりまえな生活を続けたかつた。家は私の宿屋で、子供らは私の道づれだ。その日、その日に不自由さえなくば、それでこの世の旅は足りる。私に肝要なものは、余生を保障するような金よりも強い足腰の骨であつた。

大きくなつた子供らと一緒に働くことの新しいよろこび、その考えはどうか男親の手一つで四人ものちいさなものを育てて来た私にふさわしく思われた。私は自分の身につけるよりも、今度の思いがけない収入を延び行く時代のもののほうに向けようと考えるようになった。

私は自分に言つた。

③「いっそ、あの金は子供に分けよう。」

(本文は原則として、岩波文庫『風 他二編』に拠る。)

問一 傍線部㉗㉘の漢字の読みをひらがなで書け。

問二 傍線部①「いつでも憤慨した」とあるが、「婆や」のどのような気持ちを表しているのか。具体的に説明せよ。

問三 傍線部②「これは盗みだろうか」とあるが、なぜこのように思うのか。わかりやすく説明せよ。

問四 傍線部③「いっそ、あの金は子供に分けよう」とあるが、なぜこのように思うに至ったのか。本文全体をふまえて、簡潔に説明せよ。

〔3〕

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

薩摩守忠度は、いづくよりやかへられたりけん、侍五騎、童一人、わが身共に七騎取つて返し、五条の三位俊成卿の宿所におはして見給へば、門戸を閉ぢて開かず。「忠度と名のり給へば、「落人帰りきたり」とて、その内さわぎあへり。薩摩守馬よりおり、みづからたからかにのたまひけるは、「別の子細候はず。三位殿に申すべき事あつて、忠度がかへり参つて候ふ。門をひらかれずとも、この際まで立ち寄せ給へ」とのたまへば、俊成卿、「さる事あるらん。その人ならば苦しかるまじ。入れ申せ」とて、門をあけて対面あり。事の体何となう哀れなり。

日ごろ詠みおかれたる歌どものなかに、秀歌とおぼしきを百余首、書きあつめられたる巻物を、今はとてうつ立たれる時、これをとつてもたれたりしが、鎧よろいのひきあはせより取りいでて、俊成卿に奉る。三位これをあけてみて、「かかる忘れがたみを賜はりおき候ひぬる上は、ゆめゆめ疎略そろくを存すまじう候ふ。御疑ひあるべからず。さても唯今の御わたりこそ、情けもすぐれてふかう、哀れもことに思ひ知られて、感涙おさへがたう候へ」とのたまへば、薩摩守悦んで、「今は西海の浪の底に沈まば沈め、山野にかばねをさらさばさらせ、浮き世に思ひおく事候はず。さらば暇申して」とて、馬にうち乗り、甲の緒をしめ、西を指いてぞあゆませ給ふ。三位うしろを遙かに見おくつて立たれたれば、忠度の声とおぼしくて、「前途程通し、思ひを雁山の夕べの雲に馳す」と、たからかに口ずさみ給へば、俊成卿いとど名残惜しうおぼえて、涙をおさへてぞ入り給ふ。

その後世しつまつて、千載集を撰ぜられけるに、忠度のありし有様、いひおきし言の葉、今更思ひ出でて哀れなりければ、かの巻物のうちに、さりぬべき歌いくらもありけれども、勅勘しやくかんの人なれば、名字をばあらはされず、「故郷の花」といふ題にて、詠まれたりける歌一首ぞ、「読人知らず」と入れられける。

さざなみや志賀しげの都はあれにしをむかしながらの山ざくらかな

その身朝敵となりにし上は、子細におよはずといひながら、うらめしかりし事どもなり。

〔平家物語〕 一部省略した箇所がある。

- 〔注〕 1 薩摩守忠度―平忠度。平清盛の弟。 2 俊成卿―藤原俊成。歌人。 3 鎧のひきあはせ―鎧の胴の合わせ目。
4 勅勘―天皇のとがめを受けること。 5 志賀の都―天智天皇の時代のある大津京。

問一 傍線部①。ここで数字を挙げたことから、何が読み取れるか説明せよ。

問二 傍線部②。薩摩守のどのような覚悟を表現しているか説明せよ。

問三 傍線部③。この歌集は、「勅撰集」である。同じく「勅撰集」である歌集の名前を二つ挙げ、漢字で記せ。

問四 傍線部④。なぜこの歌が「入れられ」と考えられるか。問題文全体を踏まえて、考えるところを述べよ。

〔4〕

次の文章は、蔵書家として著名な清・黄丕烈（こうひりつ）（二七六三〜一八二五）が、自らの所蔵する『論語集解』の鈔本（写本）について述べたものである。これを読んで、後の問いに答えよ（設問の都合で、送り仮名を省いたところがある）。

〔注1〕

何晏（かあん）『論語集解』十卷、有（注2）高麗本。此見（注3）諸『讀書敏求記』者也。

記云、「此書乃（注4）遼海道蕭公諱（注5）応宮、監軍朝鮮（注6）時所得。甲午初

①

夏、予（注7）以（注8）重價購之於公之仍孫（注9）。似遵王之言甚（注10）的矣。其実不

然。余向於（注11）京師遇朝鮮使臣、詢以（注12）此書、并述（注13）行間所（注14）注字、

答以（注15）此乃日本書（注16）。余尚未信之。頃獲交（注17）翁海村。海村著有（注18）

『吾妻鏡補』。举（注19）正平年号（注20）問之、海村云、「其年号正平、実係（注21）日

本年号。並非日本国王之号、是其出下吉野（注22）僭窃其国号曰（注23）南朝（注24）。

見（注25）『日本年号箋』。抛此則書出日本、転（注26）入朝鮮。遵王但就其得（注27）

書之所^ラ故誤認^ニ為^{シテ}高麗鈔本^ト耳^ノ。

(黄丕烈『蕘圃藏書題識』)

〔注〕 1 何晏『論語集解』—三国魏の何晏らが、それまでの『論語』に施された注釈を取捨選択してまとめたもの。 2 高麗本—朝鮮で手写されたり出版されたりした本を総称している。

3 『読書敏求記』—錢曾(一六二九—一七〇二)、字は遵王が、自らの蔵書に対して附したコメントを集成したもの。 4 遼海道蕭公諱応宮—遼海は遼河より東、現在の遼東半島一帯を指す。朝鮮半島の北西と接する地域。「蕭公諱応宮」は、明代の人である蕭応宮のこと。 5 監軍朝鮮—明代に蕭応宮は李氏朝鮮への軍隊を監督した。 6 甲午—一六五四年。 7 仍孫—八世後の世代をいう。自分・子・孫・曾孫・玄孫・来孫・昆孫・仍孫の順。 8 京師—都。 9 翁海村—翁広平(一七六〇—一八四二)。海村はその号。 10 『吾妻鏡補』—翁広平は鎌倉幕府の歴史を綴った歴史書『吾妻鏡』を入手し読んだ。『吾妻鏡補』は、その読書を契機に翁広平が独自に日本の歴史や文化風俗について調査し、まとめたものである。 11 正平—日本の年号(一二三四—一二七〇)。この『論語集解』に「正平」の年号が記されていた。 12 『日本年号箋』—日本の年号についての書物。

の書物。

問一 傍線部①をわかりやすく口語訳せよ。その際「予」・「之」・「公」が何を指しているのかをはっきりさせること。

問二 傍線部②が指し示しているのは何か。最も適当なものを、次の(ア)～(オ)のうちから一つ選べ。

- (ア) 『論語集解』本文の行間に記された朝鮮のハングルによる内容の注釈。
 (イ) 『論語集解』本文の行間に記された蕭応宮による李氏朝鮮への軍隊の行程。
 (ウ) 『論語集解』本文の行間に記された錢曾による自身の蔵書についてのメモ。
 (エ) 『論語集解』本文の行間に記された日本の仮名による送り仮名や返り点。
 (オ) 『論語集解』本文の行間に記された翁海村による日本の年号に関する考証。

問三 傍線部③をすべて平仮名で書き下せ。なお新旧仮名遣いはどちらでも構わない。

問四 傍線部④とあるが、黄丕烈が翁海村に質問した内容と、特に翁海村に質問した理由を、それぞれ答えよ。

問五 傍線部⑤とあるが、この『論語集解』に対する錢曾の「誤認」の内容を説明せよ。また黄丕烈は、最終的にこの『論語集解』をどのような来歴の本と考えているか、その根拠を示しつつ述べよ。